

第24話 奈良時代の学芸美術

奈良時代は学問もまた大いに進んで、歴史書や地理書や歌集なども初めて作られた。殊に、美術や工芸は、聖武天皇の天平時代に著しく進歩して、後の世にまで名高くなっている。

古事記

中国との交通が盛んになり、しきりに派遣された留学生が次第に業を卒えて帰って来ると共に、漢学は大いに進み、学者も多く出た。元明天皇の御代には、ついに書物が初めて編纂された。

それは今日にも伝わっている『古事記』であって、日本の古代の歴史書です。全部が三巻から出来ており、上巻には神代の事を、中巻には神武天皇から応神天皇までの事を、下巻には仁徳天皇から推古天皇までの事を記してあります。

純粋の国文ですが、その頃はまだ仮名が発明されていなかったのので、
「此葦原中国者、随、命既献也、只、僕住所者、如、天神御子之天津日继所知之登陀流天之御巢而、於、底津石根、宮柱、布斗斯理、於、高天原、氷木、多迦斯理而治賜者、僕者於、百
足八十垵手、隠而侍」

という風に、漢字をその音で書いたり、漢文風に返り読むように書いたりしたので、その体裁を見ると、ちょっと漢文のようにも思われるが、読んで見ると、明らかに昔の日本語をそのままに書き下したものであることが分かります。

茲に引いたのは、大国主命が高天原のお使いに向かって、いよいよこの日本の国をお譲りになるところの一節です。とだるは富足るで、欠けたところのないをいい、天の御巢は宮殿のことです。即ち、この日本国は、仰せに随って献上いたしますが、ただ、わたくしの住所をば、この国をご支配にする天孫の御殿のように、広く、高く、立派にお造り下されば、わたくしは其処で永久に楽隠居をいたすでありましょう、というのであります。

この大昔の言葉が、少なくとも此『古事記』の出来た1300年前の言葉が、其ままで、そう無理がなく今日のわれわれにも解ることを思うと、実に、不思議な気がすると同時に、国語の尊さということをおぼえずにはいられません。開闢以来、万世一系の天皇の下に、一民族で承継いで来た国の尊さというのを、改めてまた思い返さずにはいられないではありませんか。

歴史編纂の始め

尤も、この歴史書を作るということは、この御代になって初めて思い立たれたものではありませんでした。既に推古天皇の御代に、聖徳太子が大臣の蘇我馬子とご相談なされて、天皇記、国記、臣、連、その他の氏族ならびに人々の記録を作らせられたことがありました。これこそ本当にわが国の歴史書の始めでしたが、これは、残念なことに、蘇我氏が滅びた時に悉く焼けてしまった。

第24話 奈良時代の学芸美術

その後、**天武天皇**も歴史書をお作りになろうと思し召して、昔からの言伝えなどを一々取調べられて誤りをお正しになり、当時28歳で、非常に記憶のよいので聞こえている**稗田阿礼**という者に、天皇がご自身で口授して暗誦させられたが、まだ書物にはなさらぬ前にお崩れになってしまったので、**阿礼**の暗誦もついそのままになっていました。

それを**元明天皇**の御代になって、**太安万侶**という学者に仰せられて、書き取らせられたのが即ちこの『古事記』です。出来上がって天皇に奉ったのは、和銅5年(西暦712年)1月の事で、**天武天皇**が暗誦おさせになった時から30余年の後でした。**阿礼**はその時65歳であったと伝えられている。

風土記

元明天皇はまた、諸国に命じて、国名を二字に改め、それなるべく美しい文字を選ばせられた。例えば、これまで木の国といったのを紀伊の国(和歌山県)と改め、遠淡海といったのを遠江(静岡県西部)と改められた如きであります。

ついでにまた、全国の各郡に命じて、その地方の地理とか産物とか、土地の名称の起こりとか、古い伝説とかというものを記して差出させた。これが有名な和銅の風土記であり、いわば今日の地理書であります。

彼の浦島太郎の話や、羽衣や出雲国引きの伝説などは、皆、この風土記の中に記されたものです。今、残っているのは、出雲風土記の全部と、播磨(兵庫県南西部)、常陸(茨城県)、肥前(長崎県)、豊後(大分県)の風土記の大部分とだけですが、その当時の有様や国民の思想などを知るのに大層都合がよいので貴重まれている。

豊後の風土記の中の話のひとつ挙げてみますと、こんなのがあります。

豊後の国の田野という所は、広い野で土地がよく肥えていましたから、農作物がよく出来ました。百姓は皆富み榮えて安楽に日を送っていたが、そのうちにだんだん奢りに耽るようになり、ついには餅を的にして射たりした。すると、その餅は白鳥となって飛び去ったが、それからは田が荒れて、作物が出来なくなり、間もなくその地の百姓はみんな死に絶えたというのです。

日本書紀

風土記を全国から差出させたのは、いうまでもなく一つは各地の様子を知ろうとなされたのでしょうが、また一つは、日本全体の本当の歴史書を作ろうとおぼしめして、その参考になさろうとしたようです。歴史書を作るには地理の知識が大いに必要だからです。天皇は和銅7年(古事記の出来た翌々年)の2月に勅して、更に詳しい歴史書をお作らせになっています。

が、今度は一段と事が大きいのですから、**天武天皇**の皇子の舍人親王を総裁となされ、『古事記』を記して奉った**太安万侶**を始め、幾人もの学者をその下に集めさせられた。それでも急な事には行かずに、それから6年余の後、**元正天皇**の養老4年5月になって漸く出来上がりました。これが即ち『日本書紀』でありまして、官撰の国史の始めです。

第24話 奈良時代の学芸美術

全部で 30 巻あり、神代から持統天皇までの事が詳しく、且つよく整って書かれています。 多分、『古事記』や風土記やその他一切の材料を参考して作られたのでしょう。 文章も『古事記』とは全く違い、これは立派な漢文であります。

万葉集

この『古事記』や『日本書紀』と共に、わが国の宝とも言われています『万葉集』という歌の集が、やはりこの奈良時代に出来ました。 もともと歌の道は神代から伝わって来ているのですが、この時代になって、特に大いに発達したのです。

『万葉集』は全部 20 巻で、其の中には長歌、短歌、旋頭歌の三種が収められ、長歌は 262 首、短歌は 4173 首、旋頭歌は 61 首、合わせて 4496 首という数に上っています。 時代は仁徳天皇の御代から淳仁天皇の天平宝字3 年まで、凡そ 450 年間に涉っていますが、中でも持統天皇から淳仁天皇までの凡そ 70 年間の作が最も多いです。 集めた人はまだはっきり分かっていませんが、作った人は上は天皇から下は一般の民まで、あらゆる階級に涉っており、男が 561 人、女が 70 人に達しています。 いかにもその頃の人々が、広く一般に歌を詠んだかが分かるではありませんか。

人麻呂、赤人、家持

彼の百人一首のなかにある

あしびきの山鳥の尾の しだりおの ながながし夜を ひとりかも寝ん (柿 本人麻呂)

田子の浦に打ち出でて見れば 白妙の 富士の高根に 雪はふりつつ (山辺 赤人)

かささぎのわたせる橋に おく霜の 白きを見れば 夜ぞふけにける (大伴 家持)

など、皆此の集の中に入っています。

第一の「あしびきの」の歌は、中でも最もすぐれた歌人をいわれる 柿 本人麻呂の作ですが、この人は、奈良時代の少し前の人で、持統、文武の両朝に仕えて、忠君、愛国の念が深く、想像の力が豊かで、実に立派な歌を詠んでいます。 短歌よりも長歌のほうがすぐれていると言われています。

第二の「田子の浦に」は山辺 赤人の作で、この人は自然の風景を詠むのが殊に上手でしたが、人麻呂の歌が常に雄大でしたのに比べて、この人のは常に優美でありました。 短歌の方が殊に聞こえています。 長歌にも富士山を詠んだのに有名なものがあり、この「田子の浦に」は実にその長歌についている短歌なのです。 人麻呂より少しおくれて、奈良時代の中ごろの人でした。

第三の「かささぎの」は大伴 家持の作です。 この人は奈良時代の末頃の人ですが、神代以来、武人として皇室に仕えて来た名族の生まれですから、その歌には殊に忠義の心が深く籠められています。 中でもその一族に諭して、決して卑怯な真似をして祖先の名を辱めるな、という事を歌った長歌が最も聞こえています。

海ゆかば水漬く 屍、山ゆかば草むす 屍、大君の辺にこそ死なめ、 願みはせじ

第24話 奈良時代の学芸美術

という有名な歌も、此の人の他の長歌の中の一節であり、やはり大伴の氏の子らに、武人としての平素の心得を言って聞かせた言葉なのであります。

まんようが な 万葉仮名

『万葉集』にはこの外にも多くの有名な歌人の歌が収められていて、いづれも後の世の歌の手本となりましたが、この集もまた、仮名がまだ発明されていない時に出来たのですから、『古事記』と同じように、文字は漢字ばかりで、その音を借りて記してありました。これを万葉仮名というのですが、今、その一つの例を、有名な歌人の一人である山上憶良の有名な歌で示してみましょう。

しろがね　こがね　たま　何せん　に　まされる　宝　子にしかめやよ
銀　も　金　も玉　も　奈爾世武爾　麻佐礼留多可良　古爾斯迦米夜母

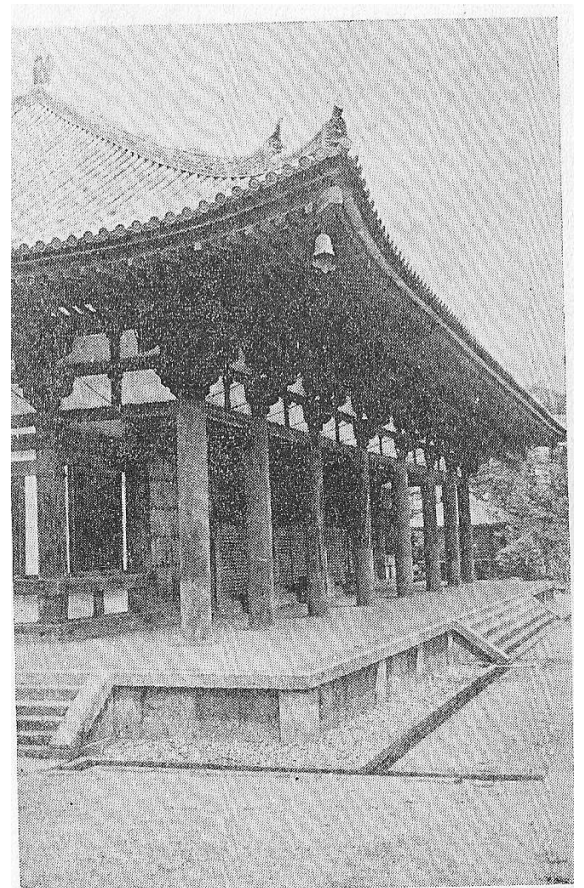
びじゅつこうげい 美術工芸

さて又、奈良時代は仏教が非常に盛んでしたために、寺院の建築や、仏像の彫刻を始め、絵画や音楽なども大いに必要となつて来ましたが、ちょうど唐からその最も進んだ文明をしきりに輸入していた時代だったので、それらの技術も見ると間に目ざましく発達しました。

殊に建築や彫刻は、むしろ唐以上の大発達をして、美術国としての日本の名を永く世界に誇り得るようにもしたのであります。



奈良　薬師寺の東塔



奈良　唐招提寺の金堂

その頃の建築や彫刻は、今も奈良に多く残っていますが、中でも殊にすぐれて立派な建築としては、

第24話 奈良時代の学芸美術

やくしじ とうとう とうしょうだいじ こんどう あ
薬師寺の東塔と唐招提寺の金堂とがいつも挙げられます。

とうとう さんじゅう かくそう しょうかい
東塔は三重の塔ですが、各層に裳階というものがついているので、ちょっと見ると六階に見えます。
のき
軒の出が多く、屋根の勾配が緩やかで、実に落ちついた、気持ちのよい感じを与えます。 はる は
春の晴れた日
などに、その前に立って、水煙の上を高く、ひとひら う とお
一片の白い雲が浮かんで通ったりするのを見ていると、何
のどか
ともいえない長閑な気がして来ます。

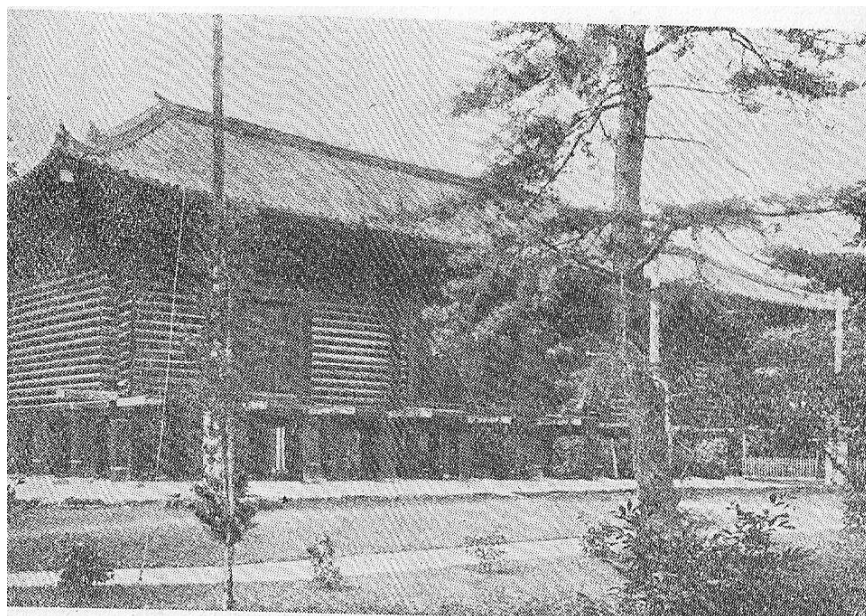
とうしょうだいじ こんどう ま おもおも ひとま
又、唐招提寺の金堂は、先づ第一に、どっしりと重々しく、中に入ると、前面の一間がずつ
とお あ まる はしら はな なら ひろびろ かん う
と通して明けてあり、大きな円い柱が離れて並んでいますから、実に広々とした感じを受けます。
こま
その細かい部分部分は、まったく完璧の域に達して、ただただ感嘆するより外はないといわれています。

しょうそういん ぎよぶつ 正倉院の御物

ちょうこく いわゆる てんびょう はったつ かつ しょ
彫刻も、わが国でこの所謂天平時代ほど発達したことは曾てないといわれるほどで、諸外国のす
さくひん くら けつ おと ぶつぞう
ぐれた作品と較べても決して劣らない物を多く作られ、それも仏像が多く、今も奈良の諸大寺に残ってい
ます。

こうげいびじゅつひん ちんちょう しょうそういん おさ ぎよぶつ
又、工芸美術品の今日に伝わって最も珍重されているのは、奈良の正倉院に蔵められている御物で
す。 およ しょうむ つか ぶつき ぶき がつき
凡そ三千点ほどもありますが、その大部分は聖武天皇がお使いになった物で、仏器、武器、楽器、
かね かがみ きちよう しな ふくしよくひん ぶんぼうぐ にちようひん ふく
鐘、鏡などの貴重な品から、服飾品や文房具のような日用品まで含んでいます。

かく のち こうみよう せんてい めいふく いの いぶつ
これは天皇がお崩れになった後に、光明皇太后が先帝のご冥福を祈られるために、その御遺物を
だいぶつ おさ とうだいじ そうこ おさ びじゅつひん
大仏に納められたのを、東大寺の倉庫に蔵めておいたものです。 しかも、それが皆、美術品としてすぐ
れた物であって、世界のどの国にもこれほどの多く昔のすぐれた工芸美術品を完全に保存しているところ
こうげいびじゅつひん かんぜん ほぞん
はありません。 しょうそういん ほうこ
正倉院は実に世界の宝庫であるといってもよいでしょう。



奈良

しょう そう いん
正 倉 院

(第 2 4 話 奈良時代の学芸美術^{がくげいびじゅつ} 終わり。

次は一旦前頁に戻り、 第 2 5 話 和氣清麻呂^{わけのきよまる} へ)